

令和元年6月26日現在

機関番号：17301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K21567

研究課題名(和文) 近世後期から末期にかけての長崎における異文化融合の総合的研究

研究課題名(英文) General study of the cross-cultural fusion in Nagasaki from last part of early modern times to last years

研究代表者

吉良 史明(KIRA, Fumiaki)

長崎大学・教育学部・准教授

研究者番号：50707833

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近世後期から末期にかけての長崎において日本古来の文化と外国の異文化が融合する模様に関して明らかにすることを目的として、同時期の長崎の文化の実態を物語る資料の収集に取り組んだ。

その結果、近世長崎の絵師・歌人・来船清人等の書簡、書画会・歌会・茶会等の記録、鎮西大社諏訪神社に伝存する社家の記録等を始めとして、計千点近くに及び資料を文献調査ならびに収集した。そして、収集した資料に基づき、来船清人・歌人・絵師等が一堂に会して書画会・茶会・歌会等の雅会を営む模様、さらに歌人中島広足の異国趣味の和歌が詠まれた背景には近世後期の長崎における唐物趣味の流行が関連していること等を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、いまだその詳細が明らかにされていないままであった近世後期の長崎の文化に関して、現代的な学問分野の垣根を越えて資料を収集・分析し、その結果同時期の長崎において歌壇と画壇が交流を盛んにしていた事実が異文化融合の背景にあることを浮かび上がらせた。

明治の西洋近代化に先駆けて洋の東西の文化が融合していた近世後期長崎の文化の新たな一面が明らかにされたことは、日本の近代化の本質を再検証するに際しても、有力な視点の獲得に繋がるであろう。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the culture of Nagasaki on last part of early modern times, which Japanese old culture and foreign culture fused. Thereby, I wrestled for the collection of documents to tell about the actual situation of the culture of Nagasaki for the same period.

then, I collected whole thousand documents. For example, the letter of artists, poets, and Chinese visiting Nagasaki. And, I found next two aspects. First, poets, artist, and Chinese visiting Nagasaki had a meeting of painting, tea party, and poem competition. Second, the trend of Chinese fashion in this period must made Nakashima Hirotari composed exoticism Tankas.

研究分野：日本近世文学

キーワード：中島広足 木下逸雲 青木永章 来船清人 唐物趣味 書画帖

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

近時、近世の長崎に関する研究は、著しく進展しつつある。その最たる成果の一つである若木太一氏編『長崎・東西文化交渉史の舞台』(勉誠出版、平成25年)は、西洋ならびに中国明清の文化が長崎に流入する模様を多角的に検証し、長崎を座標軸の中心に据えた新たな文化史の構築を試みている。収載される論攷は、日本のセミナーヨ・コレジヨにおける教育の実体、シーボルトの日本研究の諸相、志筑忠雄訳「鎖国論」の流布と影響、近世長崎における西洋科学技術と医学の導入、朱舜水の思想、長崎における黄檗美術の展開、長崎聖堂儒者南部草寿の思想、南画家木下逸雲主催の雅宴の様相等、海外文化がいかんして近世長崎の文化に取り込まれたか、多角的な検討がなされており、示唆を受けるところが大きい。

一方、惜しむらくは、近世後期の長崎に興隆した国学ならびに歌壇の実体、さらに来舶清人・オランダ人と長崎歌人との交流の様相が俎上に載せられていない点である。従来、近世長崎において洋の東西の文化が融合する模様を検証した論攷の多くは、日本の西洋近代化の息吹が感じられる事象、一例を示せば、シーボルトのお抱え絵師として西洋絵画の技法を修得した川原慶賀の作風、黄檗宗を始めとする明清の文化が同地に流入する模様等を取り上げ、学芸史の構築を試みてきた。しかし、それは近代の延長にある現代的な視点に立脚しての所為であり、近世の時代に即して異文化融合の実体が検証されているとはいえない。渡来人が文化の提供者であり日本人が受容者であるとの暗黙の前提に基づいており、渡来人と日本人が相互に影響を与えつつ受け、互いの文事を営んでいたことの実体は、いまだ検証されていない。例えば、日本の最たる文化の一つとして渡来人も愛好した和歌文芸が近世の長崎においていかに展開し、渡来人に受容されていたか、その点の考察なくして、近世長崎における異文化融合の内実を解明することは、果し得ないであろう。

## 2. 研究の目的

以上の問題意識に基づき、研究代表者は近世後期の長崎歌壇を先導した国学者中島広足の文事に焦点を当て、研究を進めてきた。結果、広足を軸とする和歌結社長崎檀園社中の構成と門人組織を検証し、オランダ通詞・唐通事を始めとする長崎の地役人を社中の基盤としていたこと、広足ならびに長崎歌壇の近世後期歌壇における位置の特定を試み、桂園派・鈴屋社中・江戸派の派閥の垣根を越えて交流していたこと、長崎歌人は舶来の文物を詠歌の題材としつつもそれを巧みに活かして皇国思想を詠んでいたこと等を複数の論攷に取り纏めた。他方、研究代表者の本研究開始以前の研究は、広足等の国学者の文事を解明することに終始しており、異文化融合の実体を検証するところまで達していない状況であった。

そこで、本研究は以上の問題点を解決するために、近時その所在が明らかになった交流の跡を物語る数多くの書画帖・書簡に着目し、いまだ学界に未紹介のまま国内外に伝存する膨大な資料群を悉皆調査・撮影することにより、その情報に基づきつつ近世後期の長崎において異文化が融合する模様の実態解明を試みた。

## 3. 研究の方法

### (1) 掛け軸・書画帖・書簡・詠草・古典籍資料等の文献調査

森の美術館 in 雲仙を始めとして、長崎歴史文化博物館・鎮西大社諏訪神社・長崎大学附属図書館・松浦史料博物館等に収蔵される資料を文献調査し、文献資料を翻字し、さらに翻字および文献調査から得られた情報をデータベース化することにより、近世後期長崎における人物交流の実態を浮かび上がらせる基盤情報を整備する。

(2) 上記(1)の文献調査より得られた知見に基づき、近世後期長崎の異文化融合に関して複数の角度から考察する。具体的な検証テーマとしては、研究計画書に記載した近世後期長崎における書画会の様相解明、磯野信春『長崎土産』を軸とした長崎名所記をめぐる文事の検証、広足国学思想の解明とその反響の特定、シーボルト・沈萍香・江芸閣の目に映った日本像と長崎文人との関連の解明を掲げた。

#### 4. 研究成果

##### (1) 各所蔵機関収蔵の近世後期長崎関連資料の文献調査

森の美術館 in 雲仙・長崎歴史文化博物館・鎮西大社諏訪神社・長崎大学附属図書館・松浦史料博物館・伊万里市民図書館・烏犀園・大阪府立中之島図書館・東京都立中央図書館・神宮文庫等の各収蔵機関に赴き、現地において計1,000点近くの資料の文献調査を実施し、あわせてデジタルカメラによる撮影、もしくはマイクロフィルム紙焼き資料の入手を行った。

##### (2) 近世後期長崎における書画会の様相解明

近時、植松有希氏の複数の論考(2012、2013)により、南画家木下逸雲を軸として長崎清譚会なる書画会が近世後期の長崎の地において度々催されていたことが明らかにされた。その成果を踏まえて、来船清人等と長崎歌壇の歌人の関係の有無を(1)の収集資料に基づき検証した。結果、複数の資料に長崎歌人と来船清人の交流の跡が垣間見えた。取り分け、森の美術館 in 雲仙が収蔵する〔瓊華文人寄書〕(天保11年揮毫、掛幅装紙本1軸、縦159.1×横91.7 糎)は、来船清人と長崎の歌人および絵師等の計15名が大振りの一枚の紙に詩歌書画を書き連ねたものであり、非常に興味深い作品といえる。諏訪神社大宮司の青木永章、光源寺住職の拙嵩、そして広足の和歌、鉄翁の墨菊図、逸雲の蝦図、秋香山人の七言絶句、昂斎・竹園の菜根図、鈕春山の五言律詩、楊覚三・沈萍香・陸吟香・鈕心園の書、劉雨錦の書ならびに山水図が所狭しと書き付けられ、各々の落款には天保11年の正月を示す文言が綴られており、長崎の歌人と絵師、そして来船清人が時を同じくして揮毫したことがうかがい知れる。同資料の紹介は、すでにコラム「雅俗草露」(『雅俗』第17号、2017年6月)所載の「長崎の雅会」において果たしており、来船清人との交流が歌人広足の和歌に与えた影響に関しては、近く別の論攷に取り纏める予定である。

##### (3) 磯野信春『長崎土産』を軸とした長崎名所記をめぐる文事の検証

渡邊庫輔氏「瓊浦集と弘化版長崎土産と」(『長崎談叢』巻輯、1928年)において、磯野信春著・画『長崎土産』(弘化4年刊、1冊)の成立に長崎の歌人が関与していたことが指摘された。しかしながら、当時の長崎の歌壇と画壇が互いにいかなる影響を与えていたか、その点に関しては従来の研究においては明らかにされないままであった。そこで、長崎歌人が和歌に詠んだ題材と長崎版画の画題を比較検証し、長崎の歌人は長崎版画に描かれた異国趣味の題材を数多くの和歌に詠んでいたことを論じた。また、長崎歌壇を先導していた広足は、西洋画の遠近法の技法を用いて描かれた長崎版画「長崎港図」等の影響を受けて、絵画の遠近法にも通じる叙景表現を駆使した和文を記していた事実を浮かび上がらせた。さらに、広足の異国趣味の作品の多くが長崎の書肆立身屋万兵衛から出版されていることに着目し、従来その素性から知れないままであった立身屋の身元を複数の資料から推定し、長崎版画の版元と同じく長崎の勝山町に店を構え、広足門人の橘加受比良を名乗り、広足の著述目録等を手掛けていた様子を明らかにした。なお、以上の内容は平成27年度秋季同志社大学国文学会において発表し、その後『同志社国文』第84号(2016年)に「中島広足と書肆立身屋万兵衛」が収録されている。

#### (4) 広足国学思想の解明とその反響の特定

拙稿「中島広足『樺島浪風記』の変容 幕末国学者の文芸と思想」(『国語国文』第80巻第4号、2011年)において、広足がシーボルト事件の折の嵐を神風と位置付け、日本が神国であることの象徴として神風を当代の国学者に喧伝していく模様を明らかにした。その成果を踏まえて、広足の国学思想の内実の解明と反響を検証し、平成30年度長崎大学国語国文学会において「鎮懐石の行方」と題して発表した。

具体的には、神宮皇后が三韓征伐の折に身に帯びたとされる鎮懐石をめぐる伝説の展開に広足が関与していたことを広足撰文の鎮懐石碑(長崎大学坂本キャンパス横に現存)に基づき論じ、日本が神国であることの象徴として鎮懐石伝説の故事を広足が碑文に刻んでいたことを明らかにした。また、長崎は神宮皇后にゆかりが深く古来より外寇防禦の要衝であり、異国防禦の要として鎮西大社諏訪神社が祀られていると論じる『鎮西大社明鑑』(諏訪神社蔵、嘉永頃成立、1冊)の記述、さらに諏訪神社大宮司青木永章と広足が親交を深め、永章により広足が諏訪大宮司学校に招請されていた事実に基づき、広足の神国思想の構築には諏訪神社が関係していることを考察した。さらに、時の長崎奉行荒尾成允が鎮懐石碑の撰文を広足に依頼していることから、広足の国学者としての名およびその思想は長崎奉行等にも広く知られるところであったことを明らかにした。

#### (5) シーボルト・沈萍香・江芸閣の目に映った日本像と長崎文人との関連

近時、唐権氏は、来船清人関連資料を精力的に調査収集され、その成果を「来船清人が見た富士山 中国における日本発見の一齣」(2018年)等の複数の論考に発表している。本研究においても、来船清人が広足に和歌の賛を請う模様等を明らかにしたものの、目下のところ来船清人等の目に映った近世後期の日本像を浮かび上がらせるところまでには達していない。一方、来船清人との交流が日本の歌人に与えた影響に関しては、令和元年度の九州大学国語国文学会において「近世後期長崎文化圏一斑」と題して発表の予定である。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 8 件)

1. 吉良史明「中島広足『樺島浪風記』試注(四) - 樺島碇泊から遭難まで - 」  
(『鯉城往来』第21号、pp.107-125、2018年、査読無)
2. 吉良史明「中島広足判『十八番歌合』攷、付翻刻」  
(『国語国文論集』第48号、pp.31-41、2018年、査読有)
3. 吉良史明「中島広足『樺島浪風記』試注(三) - 大浦出港から樺島碇泊まで - 」  
(『鯉城往来』第20号、pp.76-95、2017年、査読無)
4. 吉良史明「中島広足と書肆立身屋万兵衛」(『同志社国文学』第84号、pp.117-128、  
2016年、10.14988/pa.2017.0000015438、査読有)
5. 吉良史明「中島広足『樺島浪風記』試注(二) - 旅立から大浦碇泊まで - 」  
(『鯉城往来』第18号、pp.46-59、2015年、査読無)

〔学会発表〕(計 7 件)

1. 吉良史明「近世後期長崎文化園史一斑」(令和元年度九州大学国語国文学会、2019年)
2. 吉良史明「鎮懐石の行方」(平成30年度長崎大学国語国文学会、2018年)
3. 吉良史明「岡田清編『芸州巖島図会』の成立と近世後期広島藩の文事  
頼杏坪と近藤芳樹を軸に」(第34回九州近世文学研究会、2018年)
4. 吉良史明「近世後期長崎の雅会」(平成28年度九州大学国語国文学会、2016年)
5. 吉良史明「二つの『観蓮記』に描かれた長崎名所」  
(平成27年度京都近世小説研究会2月例会、2016年)
6. 吉良史明「近世後期長崎の歌壇と画壇」(2015年度秋季同志社大学国文学会、2015年)

〔図書〕(計 0 件)

6. 研究組織  
なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。